

身入り向上によるブランドアサリ創出のための垂下式養殖技術の開発

(予算区分 県単独 研究期間 平成27～29年度)
担当：水産技術研究所浜名湖分場 上原陽平

【研究の背景とねらい】

浜名湖のアサリの漁獲量は近年不安定な状況にあり、収入の安定に対する漁業者の思いは極めて強くなっています。安定収入のため、水揚げの安定維持に加え取引価格の向上等が重要で、前者については資源管理等が取組まれています。後者については具体的な取組みはありません。

アサリの価格決定には、サイズ(殻長)と身入り(肥満度)が重要で、他産地との差別化や、“身痩せの時期に身入りの良いアサリ”は、高価格での取引が期待されます。

垂下式養殖は、漁業が主体であったアサリにおいて、新たな生産手法として注目を集めており、餌代が不要なことや、身入りの向上等のメリットが指摘されています。その一方で、飼育器(コンテナ)が重いこと、作業者の負担が大きいことや、養殖場所の水環境(餌、流れ等)に適した手法の検討が課題となっています。

本研究では、身入りの向上によって付加価値を高める養殖技術の開発と、高価格での取引が見込めるブランドアサリの創出を目指します。

【これまでに得られた成果】

- 8月から浜名湖内5か所で養殖試験を開始したところ、多くの場所で10～11月に肥満度が高く、特に湖奥部の猪鼻湖、気賀、及び平松で高くなりました(図1)。一方、天然貝の肥満度は、10月から減少し始め、12月に最低となりました。
- 試作した砂を入れない飼育器(新型：重量1.5kg)と従来の飼育器(従来型：重量15.0kg)を11月から湖内に垂下し、両者の肥満度を比較したところ新型器の方が高く推移しました(図2)。

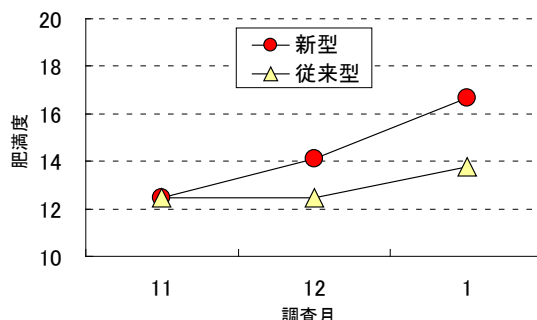


図2 新・従来型飼育器によるアサリの平均肥満度

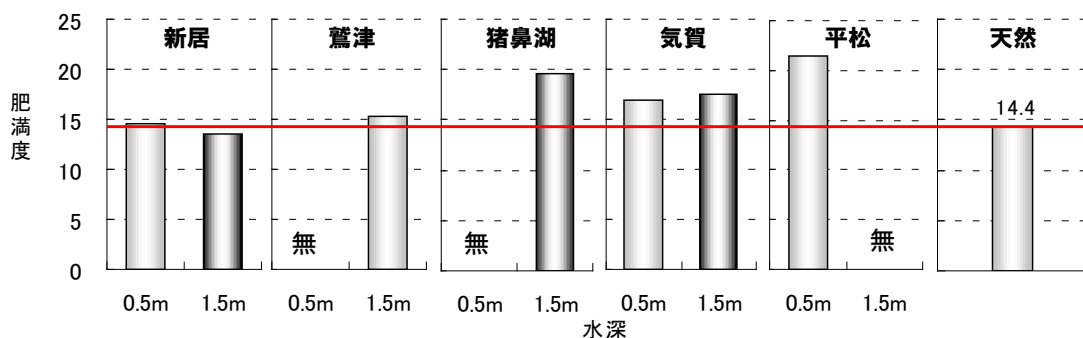


図1 各試験区の養殖貝と天然貝の10月の平均肥満度(無：飼育器の流失等により試験終了を意味する)

【期待される成果】

- 秋季に湖奥部で垂下養殖を行えば、天然貝より身入りの良い高肥満度アサリを生産できるだけでなく、新型飼育器により作業負担の軽減も期待されます。

【今後の計画】

- 湖奥部で養殖試験を継続し、飼育器に入れる基質(砂など)の種類などを検討します。
- シェフなどを対象に養殖したアサリの食味試験を実施します。

(作成 平成28年4月)